

視覚障害者スポーツの新たな可能性

埼玉・熊谷でブラインドラグビーの国際試合

楕円形のボールを投げ、キャッチし、フィールドを駆け回る。視覚障害者には無縁とさえ考えられていたラグビーが、新しい可能性を示している。日本ブラインドラグビー協会（橋本利之会長）は、10月14日、埼玉県熊谷市の熊谷ラグビー場で「ブラインドラグビー国際テストマッチ2019 in JAPAN 日本vsイングランド」を開催。日本代表「ブラインドラグビージャパン」とイングランド代表「イングリッシュ VI Roses」が3試合を行なった。日本代表にとって初の国際試合で、結果は3連敗に終わったものの、ブラインドラグビーの歴史に大きな一歩が刻まれた。 (本誌)

新しいスポーツ

この秋、ラグビーワールドカップ2019日本大会の試合を様々なメディアで楽しんだ方も少なくないだろう。だが、ボールを追って選手がぶつかり合う激しい競技といったイメージもあり、視覚障害者には関わりの薄いスポーツと考えられてきた。

ところが、ブラインドラグビーのフィールドでは、視覚障害者（弱視者）が縦横無尽に駆け回っていた。選手同士の掛け声が飛び交い、素早いパスが回され、ボールを持った相手を全力で追いかける。ユニフォームは日本が赤と白、イングランドが白と水色。緑の芝のフィールドには、観客の声援とレフェリーのホイッスルが響きわたる。

当初13日に予定されていた、ルール合わせと練習試合を兼ね

た第1試合は、台風19号の影響で14日に順延（ルール合わせは13日に実施）。ワールドカップで日本代表が強豪スコットランドに勝利した翌日であり、いっそう注目された。

3試合の結果は0-21、17-24、0-19で、日本の3連敗。ブラインドラグビー発祥の地イングランドの、個人技やチームワークの高さといった実力を見せつけられる結果となった。

だが、日本代表チームのキャプテンを務める神谷考柄さんは試合後、第1試合はイングランドの迫力に圧倒されたが、第2試合では積極的なコミュニケーションで調子を取り戻し、それが得点につながったとふり返る。敗れはしたものの、短い期間で「よく、ここまで来た」「今後の勝機はある」と力強く語った。

日本でブラインドラグビーの練習が始まったのは、今年1月。そこから代表チームを結成し、国際試合を実施したところに、選手・ファン・関係者の熱意と努力を見ることができる。

ブラインドラグビーは、2015年にイギリスで考案された新しいスポーツだ。2018年7月、埼玉県立特別支援学校塙保己一学園 教諭の松居綾子さんの下に、スポーツなどに関するイギリスの慈善団体チェンジ財団から、日本でもブラインドラグビーの普及をしたいとコンタクトがあった。同年9月に財団の代表が、今年1月にはコーチも来日し、日本初のブラインドラグビーの講習会が埼玉県川越市と兵庫県神戸市で開催された。その後、日本代表の候補選手らは、おおよそ月に1回のペースで練習を重ねてきた。

日本代表のメンバーで、ラグビー経験者は2人。その1人がキャプテンの神谷さんだ。中学高校と一般校のラグビー部で活躍し、選手の中で指導的な役割を果たす。ほかのメンバーも、